

第7回環境を考えるシンポジウム

Beyond 2020

～オリンピックを契機に日本が目指す姿とは～

2014年12月4日

日本橋室田野村ビル 6F大ホール

野村不動産主催

記録メモ作成: 梶岡 幹生

第1回環境を考えるシンポジウム
Beyond 2020

～オリンピックを契機に日本が目指す姿とは～

2014年12月4日16:00～19:00

日本橋室町野村ビル6F大ホール



中嶋代表取締役専務



PPで話す涌井先生:
東京都市大学教授



スポーツコメンテーター
田中雅美さん



首都高(株)代表取締役
宮田年耕専務



明治大学大学専門職大学院長
市川宏雄教授



第2部 レセプション



涌井・宮田・市川・田中の先生方



中村取締役の挨拶



第7回シンポの概要メモ

東京オリンピックを開催する意義、日本は何を期待され、世界に何を発信し、どのように自らに好影響を与えていくのか。実は、それは「オリンピックレガシー」としてIOCから求められていることなのです。

2020年のオリンピックは、私たちが、豊かで持続可能な新たな時代を世界に示し、次の世代に夢と希望を与える絶好の機会であり、最後のチャンスです。

このシンポでは、2020年を契機に2050年の姿を考えていくことがテーマです。

涌井先生からはロンドンオリンピックは5つのレガシープランを立てました。スポーツレガシー・アーバンレガシー・エンバイロメントレガシー・エコノミックレガシー・ユニバーサルレガシープランを掲げて、しっかり実践に移したのです。日本では、「江戸の都市の思想と文化を再評価し、現代的に再現する」というアイデアを提案されました。また世界の都市間競争の順位では、1位ニューヨーク2位ロンドン3位パリ4位東京5位シンガポールだったのがロンドンオリンピックの後は1位ロンドン2位ニューヨークに変わりました。日本は4位からどうするのか？

日本の都市は「進化」から「深化」へ、「成長」から「成熟」へ「緩和」から「適応」へ「競争」から「共生」へ「拡大」から「コンパクト」へと色々な選択があります。持続的な未来のために、どのような国土や都市を目指すのかについても、オリンピックを契機にレガシーを考えていきましょう！

市川先生からは、都市間競争では、東京は経済では世界トップ、研究開発が2位、文化交流6位です。特に弱い点は、交通・国際交通ネットワークです。

オリンピックを契機に直接的な需要の増加＝都市整備＝事業の前倒し・新規産業の創出効果・ドリーム効果を含めて19.4兆円の経済波及効果。我が国のGDPを毎年0.3%の押し上げ効果が予想されます。

2008年からの日本の人口は減少国家になっているが東京の人口は1300万を超えています。これがまだまだ増えそうです。昼夜間の人口比は、東京1:8.3 ニューヨーク3.7 ロンドン2.7 パリ1.5です。リニアが開通するころは名古屋を含んだ巨大都市圏には人口5000万人都市が出来あがりそうです。地方は人口激減します。

東京は重要で文化の成熟と国際的接触、融合と産業の創造、こういったものが重要です。今回のオリンピックを契機にJRが大変身：東京か羽田空港まで18分、新宿から羽田空港まで23分で行けるようになる、これもオリンピック効果です。

宮田専務さんからは前回のオリンピックの時に首都高速は35kmを5年間で仕上げました。その道路は45年で料金を無くし有料道路は終わりとして法律でなっていました。改修のためにもそれを15年伸ばして60年間は料金集受していいと法律改正。オリンピックを契機にリニア中央新幹線2027年に品川から名古屋。JRの羽田線。BRT。地下鉄8号線など交通フラも大きく整備されます。魅力ある都市環境の創造、災害に強い都市構造の構築など社会的な要請のあった形での計画実施を求められています。

田中さんからは3回のオリンピック出場経験から話をします。アタランタの時には、開催直前に街中にテロが起きました。安全性の確保が大事です。

シドニーでは、作った施設をオリンピック後も有効活用されています。アテネでは、選手村に入った時にびっくりしました。まだ工事をしていました。それでも、開会式が始まったら非常にスムーズに競技が行われました。アテネは国として破綻をきたし、会場が次々と廃墟化されています。オリンピックがゴールではなくその後それをどのように活用するかというのが大事なんだなというのは、アテネからも学ぶべきものがあると感じています。

涌井先生：

・市川先生から「なぜ東京でやらなきゃいけないのか、東京が勝たなきゃいけないのか」という事について国土軸、太平洋ベルト地帯、ここを強化しなければ、日本が劣化の方向に急傾斜するときに対応しきれない。このエリアが構造体となり、経済や産業構造をしっかりとらせておけば次の20年間に向け、この国を支える事が出来るのだというコメントが印象的でした」

・宮田さんからは、社会資本、特に交通ネットワークの社会資本というのは、これは私の所見も入っているのですが、個別の社会資本が1つの機能だけを担うのではなく、たとえば道路、河川とかいう縦割りではなくて、兼用工作物制度など枠組みを超えた多機能化を目指し、強靱な都市を作っていく時代になっているという話。

・田中さんからはアスリートとして色々な所感をおっしゃっていただいて、等身大でオリンピックを語って頂きました。我々はオリンピックを外側から眺める事が出来ても残念ながら内側から眺めることはできないわけでありまして、内側から見たオリンピックの話だったと思います。

・市川先生のやっておられるG P C Iという都市ランキングで何を考えているかについて話をされました。実は数値的なものだけでは東京の魅力は測れない、現在新しい指標を使い始めています。それは「感性価値」という言葉を使っています。人々が感じる感性で都市を見ようと言っています。6つの指標を使っていて、効率性、正確性、安全安心性、迅速性、ホスピタリティ、代謝。今この6つの指標を使って新しい都市の力を測る作業に入っています、と言われました。

私は、産業革命から今は環境革命に移るべきなのだと思います。

ロンドンオリンピックパークというのは素晴らしいのです。かつて英国人は78%の国土を産業革命で食ってきちゃった。その贖罪の気持ちで、英国人をして、園芸文化に目覚めさせたのです。しかも運河で栄えてきたにもかかわらず運河を汚してきた。そこでオリンピックでわざわざ産業革命の1番古い東ロンドンに、オリンピックパークを造って、しかも広大なビオトープを造り、運河沿いには最高峰のイングリッシュガーデンを作るという見事な方法をとったのです。こういう1つの観点が、さきほど私が江戸の遺伝子を東京へ生かすべきだといったのは、実はそういう観点があったわけです。

感性の価値をどのくらい持てるかという事が、実はポスト産業革命以降の環境革命のキーワードだ。コストダウンを可能にした技術的な解決が重要だと思います。

ヒントを申し上げると「自然の力を借りる」という事なのです。こうした様々な要素を戦略を取りまとめオリンピックレガシーとして持続的未來のために技術革新を伴った産業構

造の転機が、ダイナミズムの溢れた表情を持つ都市となる。2020年という年を、日本や東京が世界の課題解決先進国として尊敬されるような契機とする覚悟を持つとうというのが今日の結論だというふうに思います。

ご清聴、どうも有難うございました。

以上

追記

シンポのメモは簡略にしたため理解しにくい点もあろうかと思えます。

シンポのテープ起こししたものがあります。興味のある方は連絡いただければメールにてお送りさせていただきます。